



## 「看護師が行うエンゼルケア」 復元納棺師 笹原留似子



### 第4回 死後のお手当て

#### 死後変化を予測した処置(お手当て)

保湿は化粧前の下地の意識ではなく、皮膚を安定させるための「処置(お手当て)」です。



※うぶ毛は電気シェーバーや、安全刃の付いたカミソリでクリームを使用し剃ることで、より状態良好、清潔感を表現できます。

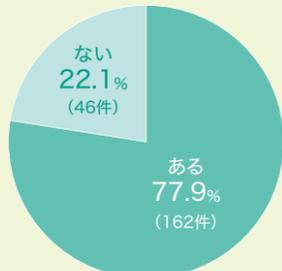
#### 目閉じ処置 ポイント



※摩擦を防ぐため、必ず保湿クリームを使用し実行してください。

#### ヒュー・メックス News!

Q. 体液等の漏出を経験されたことはありますか?



#### エンゼルケアに関するアンケート「体液等の漏出について」(2015年)

ヒュー・メックスでは、毎年の各展示会出展の際、新商品開発、現商品改良の資料として、ご来場者の皆様にアンケートのご協力をいただいております。今回は、そのアンケートの中で、5年に一度調査させていただいております、体液等の漏出についての結果です。

##### アンケート実施場所

- 第17回 日本救急看護学会学術集会 佐賀 (平成27年10月16日～17日)
- 第11回 日本クリティカルケア看護学会学術集会 福岡 (平成27年6月19日～20日)
- 看護フェア2015 兵庫 (平成27年6月9日～11日)

2020年、今年もまた色々なお声をいただきたいと思います。新型コロナウイルスの影響で、大きな展示会等は延期や中止になっております。再び、展示会出展の際には是非またご協力をお願いいたします。

東日本大震災、写真パネル展をご支援いただいた皆様へ

## 東日本大震災 写真・震災絵日記パネル展

～2020年2月11日(火) 北上市さくらホール/いのち新聞実行委員会～

この度は、いのち新聞の企画にご支援をいただき、心より感謝を申し上げます。

「いのち新聞」は、被災者遺族、様々な理由でご遺族となったメンバー約30名で構成され、結成8年を迎えます。岩手県北上市の株式会社桜内に事務所を置く任意団体です。

今年も岩手県警察本部と被害者支援センターと合同で開催し、今年初となる「岩手県警察本部音楽隊」による演奏と、「東日本大震災に於ける身元不明、行方不明者相談会」は、警察本部の検視官室と科学捜査研究所、鑑識課がチームになり、私たちのイベント企画の会場の中に窓口が置かれ、大きな話題となりました。

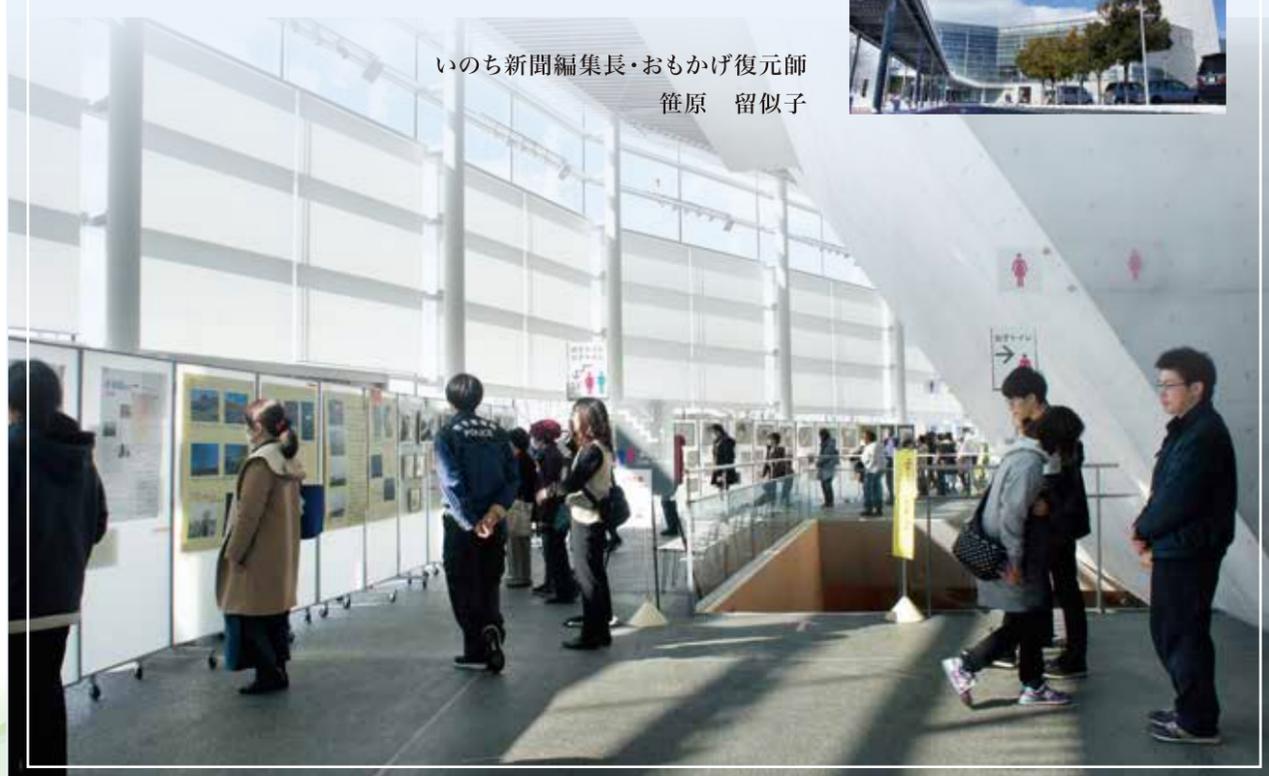
お空に子どもを送った「母ちゃんの会」の小さなアレンジメントコーナーは今年も大人気で、ご来場いただいた多くのご遺族が、大切な家族の写真に供えたとお話しされ、胸に抱いて帰られました。

おかげさまで今年は、700名を超える皆さまにご来場いただきました。今年には特に、行方不明の家族の帰りを待つ皆さまの所に、情報が届いて欲しいと願う私どもの理念をご理解、ご協力、ご支援いただいた報道関係は9社となり、多くのご遺族の皆さまとつながることができました。

来年の3月11日で、東日本大震災から10年を迎えます。応援して下さった皆さまに励まされ、今後も活動を続けていく所存です。今後も皆さまのご多幸をご祈念申し上げながら、引き続き私どものご支援どうぞよろしくお願い申し上げます。

最後に、この企画情報を掲載していただいたヒュー・メックス様、そしてヒュー・メックス様の各地を担当される営業さんを通して、ポスターの貼り出しに御協力いただきました各病院の皆さまに、この場をお借りいたしまして御礼を申し上げます。ありがとうございました。

いのち新聞編集長・おかげ復元師  
笹原 留似子



# 「光が射すとき、色々。」

## 大規模災害、テロ対策訓練

クローズドなので詳細はお伝え出来ませんが、私は年に2〜3回、各県警察本部と法医学者が各県から集まり企画する「大規模災害、テロ対策訓練」に民間からは1人だけですが参加させていただいています。訓練は警察庁、各県警察本部、海上保安庁、自衛隊、消防が参加する特殊な大規模合同訓練で、様々な想定の中、緊縛した状況の中、粛々と行われます。一つ一つの流れや、感染エリアごとの取り扱い、遺体からの感染管理も、とても厳しく行われています。



東日本大震災当時の安置所と同様、安置管理については警察管轄のルールがあり、ご遺族が不安にならないようにという配慮や感染管理も含めて、死後処置や遺体管理を行う上でも法医学者、検案医の医師や警察との連携が必須です。

## 学者、技術者も通われる講座

ご縁があつて現在、2つの県から法医学教室合同で法医学教授(医師)、法歯学者(歯科医師)、技術員の方などが月に1〜2回、長期コースの内容で弊社にお勉強に来られています。その内容は、早期死体現象から後期(晩期)死体現象と追加の内容が中心で、その内容は**漏液、止血処置の方法、死後変化などにより変化した表情を戻す、身だしなみ(死化粧)、変形に伴う復元**と様々で、カリキュラムの内容としては膨大です。

弊社では、日総研主催セミナーや総合ユニコムなど各業界の出版社が企画した、全国主要都市で行う、受講される対象者に合わせた内容の出張講習の技術セミナー以外に、「直接技術を指導して欲しい」というご要望にお応えした内容で、私が直接指導をさせていたたく「専門技術育成コース」があり、その方の現場に合わせたカリキュラムを御提案し、一コマずつ弊社のセミナールームの中で丁寧に進めていく人気のコースです。各法医学教室の皆さまも、専門技術育成コースを受講されています。

## 葬儀社からのアンケート

全国各地から集まる葬儀業界向けのセミナーでは、**セミナー前アンケートの実に8割以上が「漏液、出血、死臭の止め方」を希望し、医療向けセミナーでも6割以上が「漏液、止血、疾患による死臭」対処の要望があります。それは、亡くなられたご本人や遺されたご家族が困惑しているという理由です。**そのことに気が付いてくれる人がいるということ、対処してくれる人がいるということ、ご本人や遺されたご家族にとって、とても心強いことだと思います。

ご存知の通り現場は、技術を求められます。評価が良ければ信頼へ。評価が悪ければ、不信感へ。つまり、技術が直接の評価につながるため、ある意味怖いとも言えます。技術とは死後変化を正しく知って、正しく行うことが求められます。

医療・葬儀業界向けの多くの学会やシンポジウム、セミナーの中では「軽度死後変化」と「対処法」、「グリーフケアの実践法」など、早期死体現象を中心に現場に沿った形でお伝えしていますが、警察経由の重度処置、特殊遺体復元処置については、後期(晩期)死体現象を中心に法医学者、検案医、警察官対象の学会や講習の中でお伝えすることが多くあります。

## 死後処置は「その方の人生に敬意・礼を尽くすもの」

**死後処置は「その方の人生に敬意・礼を尽くすもの」だと私は思っています。死者に絶対に恥をかかせないという理念で現場へ入ります。**これまで独学で現場実践をして参りましたが、多くの医療や検案医の学会に出向かせていただいたご縁から、現在は外科、緩和医療などの医師から体のしくみを、法医学者(医師)から死後現象の原因についてご教授いただけるようになりました。今後もセミナーで最新の情報をお伝えしていきたいと思えます。

## 私の家族

プライベートな話ではありませんが現在、88歳の父、80歳の母、二人とも寝たきりで両親の介護をしています。自宅で看ながら仕事や出張を続けられるのも、家族や主治医を中心に力を借りて、心強いチームの皆さんに支えていただいているお陰です。父も母も、交代で体調を崩し、交代である世まで逝ったり来たりして楽しそうにその出来事を話し、結局この世に戻ってくるというハプニングばかりですが、特に母が失語であることを含めて両親の介護を通して学んだことは、コミュニケーションは「言葉」も大切ですが、表情や雰囲気も重要であるということです。

## 死後の変化

人の体が生体から死体へと呼び方が変わったとき、生体には無かった死後変化が発生することで関わり方も随分変わります。

**死体は、ATPやミオシンフィラメントなどのエネルギー体が枯渇していく影響と、疾患を含めた死因と、体が置かれた環境の中で気温や室温に大きく影響されて変化をしていきます。**その時、漏液や出血、死臭が強く出ると、「死体の視かた」渡辺博司、斎藤一之著/東京法令出版・「NEWエッセンシャル法医学」高取健彦監修 長尾正崇・中國一郎・山内春夫 編/医葉出版株式会社 **を参照ください。**遺された家族は死者を守りたい、守ってあげられなかったという心理の中で、「自分のせいだ」「誰かのせいだ」と自責の念を強く持ち始め、悲嘆が深くなります。これで、遺族の心情に拒否や攻撃性加わり、イレギュラーな問題が発生しています。ただ、医師が異常死体と判断した時には、警察が入りますので、処置を含めた全ての死後処置は行えません。その場合、検視が終了してから行うことになります。

この深い悲嘆のプロセスを知っておくことで、リスクマネジメントを行うことが出来ます。漏液、出血、死臭が出る前に、又は出ている今、**看取り直後の早期に死後処置を行うことで「死体」が起こす死後変化に対応できます。**「誰が死後処置をするのか」ではなく、「このプロセスを知っている人が行う」ことが最も大切です。同時に、正しい死後処置を行えることは、誰からも信頼を得られるということは言うまでもありません。その後のコミュニケーションも深く、スムーズに行えます。

母が寝たきり、失語になって11年が経つ今年。11年悩み続けていたことの答えが出た瞬間が、先般ありました。母との約束を破って、死んでほしくないと考えた当時の私は、延命を選んでしまいました。ベット上で、寂しそうに静かに窓の外の空を眺める母に、謝ることさえ出来ない日々が11年続いていました。

先日、逝きそうになって、帰って来ました。母は意識を取り戻して、私に向かってキラキラした目で見つめて来ました。何か伝えたいのだなと思い、「三途の川に行ってきたよって、こと？」と聞くと、頷きました。お空の上で逝った、会いたい人たちに会ってきたようです。「良かったね!」という、満面の笑みでした。

「そのままみんなの所に逝きかけたか?」と聞くと、首を横に振り、「こつちに帰って来たかったの?」と聞くと、頷きました。「みんなに会えたのに、こつちの方が良いの?」と聞くと、笑顔で頷き、「こつちの方が、楽しい?」と聞くと、満面の笑みで手でオッケーサインを出しました。「今、楽しい?」と聞くと、大きく頷きました。年を重ねたことで更に涙腺が弱くなっている私は、号泣しました。私は、この瞬間に苦しみの呪縛から解放され、今を楽しんでいると思わせてくれた、私の姉と医療の皆さんに感謝をしました。

どのような死を迎えようと亡くなるご本人や遺されるご家族には、譲れない何かと、こだわりがあります。そのこだわりを、しっかりとこだわれるように、死後処置は安心出来る仕上げを行うことが大切です。セーフトイセットとメモリーションは、その目的を達成させるために頑張ってくれる、私の最高の相棒です。

復元納棺師 笹原 留似子